

古澤瑞希

1. 事業実施の目的

今回の調査は、博士論文執筆のための調査として実施した。

2. 実施場所

佐賀県嬉野市

3. 実施期日

2022 年 11 月 1日（火）～ 2022 年 11 月 5日（土）

4. 成果報告

●事業の概要

佐賀県内には、鉦のアンサンブルを用いる芸能である浮立(ふりゅう)が多く伝承されており、その数は 2018 年時点で 180 件以上にのぼる。鉦のアンサンブルは、双盤に似た楽器である鉦の演奏を主とした「鉦浮立」(かねふりゅう)という名前と呼ばれる芸能以外にも、面をつけて舞うことを主とした「面浮立」(めんふりゅう)や、太鼓を叩きながら舞うことを主とした「天衝舞浮立」(てんつくまいふりゅう)、獅子頭をつけて舞うことを主とした「獅子舞」などの芸能にも多く用いられている。また、民俗芸能緊急調査報告書のために佐賀県が詳細調査した芸能全 31 件のうち、鉦のアンサンブルを含む芸能は 21 件である。このことを鑑みると、鉦のアンサンブルは佐賀県内に伝承される芸能の音楽的要素において、基幹をなすものであると考えられる。

鉦のアンサンブルを含む浮立のうち、用いられる鉦同士の音高の差異を認識せずに演奏を行う浮立は佐賀県全域に見られるが、鉦同士の音高の差異を認識して演奏を行う浮立は佐賀県西部に集中している。ここでは、前者を鉦単声アンサンブルと呼び、後者を鉦複声アンサンブルと呼ぶ。鉦単声アンサンブルでは、10 個程度の鉦が同時に同じリズムで演奏され、鉦複声アンサンブルでは、3 個から 8 個の鉦を組み合わせた演奏が用いられる。

佐賀県内では、どちらの鉦のアンサンブルを持つ浮立においても、鉦以外の楽器として、太鼓と笛が用いられることが多い。浮立の鉦、太鼓、笛の合奏において、笛はほとんど唯一の旋律楽器であり、他の楽器をリードする役割を担っている。これまでの調査で、鉦複声アンサンブル型の浮立では、笛が他の楽器をリードするだけでなく、演奏や、行事の行程そのものをコントロールしていることが明らかになった。

本事業による調査では、5 個の鉦と 2 種類の太鼓、笛によって演奏される、鉦複声アンサンブル型の浮立である「N の浮立」を対象とした。この芸能では、地域内にいた唯一の笛奏者が 2017 年冬に早逝して以来、笛奏者が不在となっている。その結果、筆者が最初に N 地区を訪れた 2017

年11月3日の「X神社のおくんち」を最後に、公的な場における浮立の演奏は一度も行われていない。

申請者はこれまで、2020年から2022年の夏にかけて、佐賀県の杵藤地区に属するN地区において、聞き取り調査や小中学生を対象とした笛の練習での参与観察や、地区の行事やイベントへの参加、N地区に隣接するS地区の笛奏者から笛の演奏の手ほどきを受けそれをN地区の中学生に伝えるなど、笛奏者の不在と新型コロナウイルス感染症の流行という状況のなか、実践的に伝承の過程にかかわりながら調査を行ってきた。

2022年度の「X神社のおくんち」において浮立の奉納を行う可能性があるという話を、2022年の8月にN浮立保存会の会長の口から耳にした。申請者は、博士論文執筆にあたって、公的な場における現在のNの浮立の演奏を観察しておきたいと考え、本事業の申請を行った。しかしながら、「新型コロナウイルス感染症の流行の影響」という理由で、浮立の奉納は行われなかった。そのため、2022年11月2日には「X神社のおくんち」の準備に、11月3日には「X神社のおくんち」の神事に参加した。また、3日の午後には、Nの近隣にあるC地区の「Y宮のおくんち」の様子も観察した。11月4日には、N地区・S地区の住民への聞き取り調査を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業によって、以下の3点の成果を得られた。

1点目は、「X神社のおくんち」の、準備と神事の様態を記録できたことである。申請者はすでに「X神社のおくんち」の調査を2017年と2021年にも行っている。しかしながら、2017年は浮立の奉納のみを観察し、2021年には氏子であるN地区とS地区の住民を対象とした抽選会と、その後のN地区の球技大会の参与観察を行ったのみであった。今回の調査によって、準備が誰によってどのように行われているのか、そして、神事がどのように執り行われ、どのような人物が参加しているのかを記録することができた。

2点目は、「Y宮のおくんち」の様子を知ることができたことである。Nの浮立には、1950年代まで、「Y宮のおくんち」に参加していたという歴史があり、Nの浮立の研究を行ううえで、「Y宮のおくんち」は重要な要素となっている。また、「Y宮のおくんち」では、今年はNL地区によって浮立が奉納された。N地区とX神社の所在地であるS地区、Y宮の所在地であるC地区、そして今回「Y宮のおくんち」において浮立を奉納したNL地区は、4地区とも同じ小学校の校区内にあり、新型コロナウイルス感染症の流行による影響の程度はほとんど同じである。それにもかかわらず、X神社では浮立の奉納が行われず、Y宮では浮立の奉納が行われた。このことから、X神社の氏子と、Y宮の氏子による「おくんち」という行事のとらえかたや考えかたの違いを考えることができた。

3点目は、「Y宮のおくんち」において、佐賀県の民俗学研究を牽引する金子信二氏と面会し、意見交換ができたことである。金子氏は佐賀県内のほとんどの市町の市史の執筆を担当しており、ほぼ唯一の、佐賀県を専門とした民俗学研究者といえる。申請者は、金子氏から佐賀県の民俗について学び、金子氏にNの浮立や「X神社のおくんち」の情報を伝えた。

本事業の成果は、東洋音楽学会が発行する『東洋音楽研究』に投稿する予定である。

●本事業について

この事業により、経済的負担が軽くなり、フィールドに滞在することが可能となった。博士論文執筆に向けた発表や投稿論文の準備を進めることにもつながり、大変重要な機会を得ることができたことにとっても感謝している。今後もこの事業を継続していただきたいと心から願っている。